



今日の紙芝居は、『立正安国論』です。

大聖人様が立宗宣言された建長年間頃よ

り、大火事、暴風雨、大洪水、山崩れ、疫病、

大地震、大干魃、飢饉などなど、今までにな

かった異常な出来事や、悲惨な災害がうち続

きました。

一体こうした前代未聞のすさまじい災害が

なぜ起こるのか、こんなにも連続して起こる

のはなぜだろうか？そのことを解き明かすた

めに、大聖人様は『立正安国論』を著され

ました。

日蓮大聖人様の御生涯は、『立正安国論』

の実践に終始されました。その実践と行動は

『安国論』に始まって『安国論』に終わると

言われるように、『安国論』こそ大聖人様が

御法を弘めていく上での根本でした。

その『立正安国論』が著されて、平成21年

で750年となります。紙芝居を通してその意義

をいっしよに勉強しましょう。

では始めます。



「おーい。何だ？何事だ？」

「なんか知らない坊さんが妙なこと言っているらしいぞ！」

大聖人様は、末法の全ての人々を救う教え、南無妙法蓮華経を初めて唱え出し、弘める場所を、政治の中心であつた、鎌倉に決めました。まだ誰も弟子はいません。たった一人で、鎌倉の辻々に立たれて、邪宗を打ち破る辻説法を始めました。

「釈尊はたくさんのお教えを説かれたが、全ての人々が幸せになれる真実のお教えは、念仏宗でも禅宗でも真言宗でもない。この法華経に説かれる、南無妙法蓮華経のお教えである」と、道行く人に法を説きました。

「なにに？南無妙法蓮華経だと？そんなもの聞いたこと無いぞ？」

「いかげんなこと言うな？おれは南無阿彌陀仏しか信じないぞ！」

「これでもくらえ！」

と石を投げるやからもいるしまつです。



そのころ、未だかつてだれも経験したことのない、大地震、大洪水、大火事、飢饉、疫病などなど、悲惨な災害が次々とおこり、人々はおびえきつた暗い不安な日々を送っていました。

(少し間を開けて)

グラグラ：：今まで感じたことのない大きな地震が起こりました。

正嘉元年八月二十三日の夜のことでした。

「わあー、助けてくれえー」

「いったい何が起こったんだあー」

神社やお寺も、もちろん民家も全てが壊れ果てました。

人々は散り散りバラバラ、真っ暗な闇の中を逃げまどいました。



大洪水も何度も起こりました。

大雨が降り、山が崩れ、洪水は容赦なく、民家を押し流し、田んぼや畑を押し流し、濁流となった洪水は、多くの人々を飲み込んでいきました。

「おかあちゃん。みんな流されていくよ？ 私たちは大丈夫？」

「しつかりつかまっておくんだよ」

「いったいどうなっちゃったんだらうねえー
神さんも仏さんもおらんのかねえー」



地震や洪水や火事によって、多くの人々が死んでしまいました。

いたるところに死体が転がり、助かった人も途方に暮れ、道行く人に助けを求めましたが人々の心は濁りきり、助ける人もいません。

「誰かこの子を助けてください」

「人のことなんかかまってるかい。自分のことだけで精一杯なんだよ」

「お願いだ助けてくれ」

「やなこつた。助けている間にまた地震が来たらどうする、まっぴらごめんだね」

未だかつて経験したことのない、災難にあり、世情は荒廃し、人々の命は濁りきってしまいました。

まさに地獄そのものの姿でした。



悲惨な地獄のような姿を、悲しまない人は一人もおりません、

さりとして、そうした災難や人々の不安を解決する方法は、誰も知りませんでした。

幕府はただただ、ありとあらゆる神社やお寺に、祈祷きとうを命じて祈らせるばかりでした。

しかし、なにも解決しないばかりか、帰って不幸を増やしていくだけでした。

「真言の祈りも効かない」

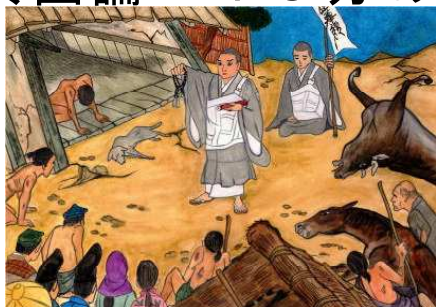
「念仏の阿弥陀も効き目が無い」

「神に祈っても守ってくれない」

「今の全ての神社やお寺で祈っても効き目があるはずがない」

「このことを人々に訴うったえていかねばならない」

このような悲惨な地獄のような状況じょうきょうの中、日蓮大聖人様だけはその原因がどこにあるのか、解っていたのです。



「おのおの方、この悲惨な状況がなぜ起きるかお分かりか？」

「仏の教えにも色々あることを知らなければならぬ」

「今、末法の時代は、南無妙法蓮華經の教えによらなければ、幸せにはなれないのじゃ」

何度も辻説法をしている内に、大聖人様のお話を耳にする人も増えていき、その中で、

「あの日蓮御房ごぼうの言う通りかもしれないぞ」と、思うようになる人も出てきました。

しかし、大聖人様はこの原因と、解決方法を、御經文を引いてはつきりさせようと考えられました。



そして、全ての御経がそろっていた静岡県
の実相寺じっそうじというお寺の御経蔵に入られました
た。

この時に、実相寺の近くに四十九院しじゅうくいんという
お寺があり、そこに13才のまだ若い日興上人
様がおられました。そして、一切経いっさいきょうを御覧に
なっている大聖人様に、縁あつてお給仕をす
るようになりました。

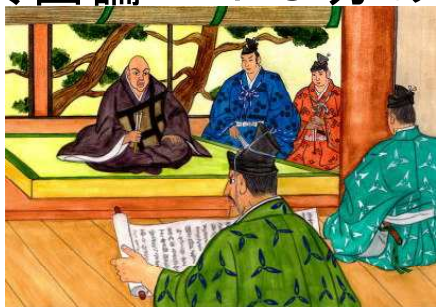
「このお方こそ真実の教えを説かれるお方で
ある。弟子にさせていたただこう」
と、この時日興上人様はお弟子にしていただ
いたのです。



なぜ次々とあまりにも悲惨な災難が起こるのか？

大聖人様は、仏法の正邪せいじやをはつきりさせる「立正安国論」をお書きになりました。その中には、全ての御経を御覧になった上で、

「世の中はみんな南無妙法蓮華経の正法に背そむいて、人々は残らず間違った悪法を信じている。それ故に、人々を守るべき諸天善神は国を捨てて、天上に去ってしまい、聖人もその場を去って戻ってこない。この為に、悪鬼魔あくきま神じんが入れ替わって、災難が起こるのである」
と、明快めいかいに指摘され、さらに、このまま、南無妙法蓮華経の正法に背き続けるならば、必ず同土討どうしゅうちや、外国が攻めてくる大きな難が起こるであろうとも、立正安国論の中で予言されたのです。



文^{ぶんのう}応元年7月16日、大聖人様がお書きになつた「立正安国論」は、時の政治^{せいじ}的権力者^{けんりよくしや}であつた北条時頼^{ほつじやうときより}に差し出しました。

時頼は禅宗を信じ、他の多くの者は念仏を信じていました。

にもかかわらず大聖人様は、

「災難^{げんきやう}の元凶である念仏を断ち切れ！」

「邪宗を信じる心を改めて真実の正法である南無妙法蓮華経を信じるならば国は安らかになる」

と、はっきりと示されたのです。

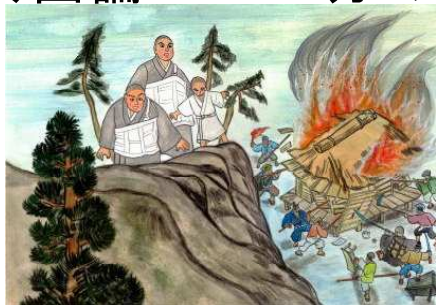
幕府の指導者たちは、

「こんな無礼^{ぶれい}な書はありませんぞ！」

「日蓮の言う通りにしないと、もつと恐ろ^{おそ}しいことが起きるだど？」

「おのれ日蓮め、今に見ておれ！」

と、大聖人様の教えに耳を傾^{かたむ}ける気持ちなどまったくありませんでした。



「おつしよう様。こちらです。裏山に逃げましよう」

「さあ、早く早く。こつちです」

「心配するでない。こうなることはわかつておつたこと。正しい仏の教えを説けば、必ず難なんが襲おそってくる。よいか。お前たちもよく覚おぼえておきなさい」

大聖人様が『立正安国論りっしょうあんこくろん』を提出されて、一ヶ月後のことでした。邪宗じやしゅうの間違いを徹底的に指摘されて、頭に血の上った幕府の役人や邪宗の者どもが、大聖人様のおられた松葉まつばヶ谷がやつの家を襲ってきたのでした。

「おりやく。こんな家ぶつこわしてしまえ」

「日蓮く。出てこい、日蓮く」

「念仏を唱えると地獄に行くとはどういうことだ」邪宗の者どもは、乱暴らんぼうの限りを尽くしました。

からくも難まぬがを免れた大聖人様は、一時いつとき鎌倉を離れ、今の千葉県に住んでいた富木常忍殿とまきじょうにんの館やかたに身を寄せられました。



年が明けて、春になり、大聖人様は再び鎌倉に戻り、街の辻に立ち、

「今までの念仏や禅宗などの教えでは幸せになれない、皆さん南無妙法蓮華経と唱えるのじゃ。これより他の教えはない！」と、折伏の声を上げていました。

鎌倉の人々は、未だに大聖人の言うことを理解できない人ばかりでありましたが、中には、少しずつ、耳を傾け、教えを信じる人が増えていきました。

しかし、大聖人様が鎌倉に戻っていることを知った幕府の役人は、大聖人様を捕らえ、ただの一度も調べることなく、伊豆に流罪にしてみました。

その後も、小松原というところで襲撃され、額に傷を受け、左手を骨折する大けがをされました。

大聖人様は法華経を弘める故に、その身に数々の難を受けられたのです。



そのころ、お隣の大陸では、蒙古という国が、アジア大陸はもとより、ヨーロッパ大陸までその勢力を広げていました。

その大国、蒙古から

「蒙古の家来となるように。ならなければ武力で攻め込むぞ」

というような内容の国書が届きました。

立正安国論が示されて8年目のことでした。

大聖人様が予言された、他の国が攻めて来る、という予言が的中したのです。

大聖人様は、幕府の役人や様々なお寺など、合計11ヶ所へ、

「蒙古の攻めを屈服させるのは我日蓮しかない。国の安泰は南無妙法蓮華經の教えによらなければならぬ。様々な祈禱はなんの解決にもならない」

と断言する書状を送りました。

しかしその後、大聖人様は、竜の口で首を切られて殺されそうになったり、佐渡へ島流しになる大難を受けられるのです。



大聖人様が佐渡に御流罪になつて居る間も
蒙古は使者を遣わしてきました。

あわてふためいた、時の執権時宗は、大聖
人様の予言が当たっている上、罰すべき根拠
もないことから島流しを許し、幕府へ出頭す
るように命令しました。

幕府の役人たちは、以前と違い、柔らかに
大聖人様を迎え入れ、幕府の要人たちは

「念仏とは、真言とは、禅宗とはいかなる教
えであろうか？」

と次々に質問しました。

これに対して大聖人様は、経文を示されつつ、
「法華経以外の教えでは一切幸せになれない」
「南無妙法蓮華経と唱えることがすべての根
本である」

と力強く再度折伏したのでした。



幕府は再三に亘る大聖人様の折伏に耳を貸しませんでしたが、蒙古が攻めて来るとい
予言の的中だけは恐れまりました。

そこで、大聖人様に

「土地と建物を寄進するゆえ、どうか国家の
安泰を願っていただきたい」

と、申し出てきましたが、大聖人様の真意を、
理解できない幕府の申し出は聞き入れずに、
大聖人様は身延の山の中に入りました。

身延に入って5ヶ月後の文永11年10月、つ
いに大聖人様の予言が的中し、約2万5千人
の蒙古の大軍が九州博多に攻め寄せてしまし
た。また、幕府の内部では様々な対立や、同
士討ちの争いごとが起こっていました。

さらに、第一回目の蒙古襲来から七年後、
弘安4年5月、再び蒙古は攻めてきました。
この時の兵隊の数は、なんと14万人余りとい
われる大軍でした。

ことごとく立正安国論の通りになったので
す。



しかし、蒙古の大軍は神風かみかぜなどによつてこ
とごとく敗れ去り、日本を占領せんりょうすることはで
きませんでした。どうしてでしょう。

二回目に蒙古もうこが攻めてくる二年前のこと
です。日興上人様が弘教に専念されていた熱原
の農民に大法難が起きました。

入信間もない熱原の農民たちが二十名捕つかま
り、内三名が殺されてしまいます。

農民たちはどんなことがあつてもお題目を
唱えることを止めようとはしませんでした。
たとえ殺されようとも、この信心だけは絶対
に止めなかつたのです。



大聖人様は、これら熱原の農民たちの強い信心を聞くに及び、いよいよその時が来たことをお感じになられ、全世界の人々を救い、幸せに導いてくださる、大御本尊様を顕されました。弘安二年十月十二日のことでした。

この国には、末法の御本仏様がおられ、大御本尊様がおられるが故に、蒙古の大軍は敗れ去ったのでした。



弘安4年5月の蒙古襲来の翌年9月、
体調を崩された大聖人様は、温泉へ身体を治しに行くことになりました。

それに先立ち、大聖人様は大御本尊様をはじめ教えの一切を、日興上人様お一人にお譲りになり、その後の弘通を託されて、身延を出發されました。

日興上人様を始めとするお弟子の方々と、ゆつくりとお体をいたわりながら、進んでいきました。

途中、池上兄弟の兄、宗仲の家にお立ち寄りになりましたが、そのことを伝え聞いた御信徒の方々が、大聖人様にお会いするため集まってきました。



そこで、大聖人様は御病気の身でありながら、集まった方々に対して「立正安国論」の講義をされたのでした。

「邪法邪義じゃほうじやぎがはびこる故に災難が起こる。その邪宗邪義を打ち破り、南無妙法蓮華經の正法を立てることこそ、国が安らかとなり、人々が幸せになる唯一の道なのである」

と、日興上人様を始めとする弟子信徒一同に、あらためて熱烈ねつれつな気迫きはくで御講義をされ、それから間もなく、大聖人様は御入滅ごにゆうめつあそばされました。

まさに、大聖人様の御一生は、立正安国論に始まって立正安国論に終わるお姿であったのです。

その立正安国論が顕あらわされて750年、私たちはその大聖人様の御精神をしつかりと肝きもに銘めいじて、唱題・折伏・御登山に頑張っていきましたよう。

以上で終わります。